

『管子』における頌水思想をめぐって

久富木 成 大

- はじめに
- 一 「物」について
 - 二 水
 - 三 宇宙構造
- 注 おわりに

はじめに

『管子』の書には、万物が水から生じたとし、水の能力を神の偉大さに比する、いわゆる「頌水思想」が唱えられている。そのため、全篇にわたって、物事を水のことにとえて述べたり、あるいはまた、水の性質をもとにして人事百般のあり方を説き明かしたりすることが多い。しかし、それらの水にかかわりのある種々の記事のうちで、後に本文で触れる三種類の動物妖怪の出現と存在の意味については、非常に興味をそそられるものがある。小稿では、この『管

子』の書における頌水思想と、これらの動物妖怪ともいえる存在との持つ意味を、そこに展開されている宇宙構造とのかかわりのなかで、解き明かしてみたいと思う。

小稿で扱った『管子』の本文は、主として安井息軒の『管子纂詁』にもとづいているが、しばしば別の研究書や注釈書等によって改めたところもある。そうした箇所については、その都度、注などに記しておいたので、明らかにするであろう。

一 「物」について

1 「物」のなりたち

一般に「物」については、よく言及されている。しかし、「物」というのは、そもそも何であろうか。『管子』の書において考えられている「物」について、いろいろな角度から、我々は先ず確認しておく必要があるであろう。

○人は強に立ち、善につとめ、能にあぢはひ、ことに動く者なり。

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

聖人はこれなし。これなければ則ち物と異なる。異なれば則ち虚、虚は萬物の始なり。(人者立於強、務於善、未於能、動於故者也、聖人無之、無之、則與物異矣、異則虚、虚者萬物之始也) Ⅱ 『管子』卷十三、心術上第三十六)

ここでは聖人の無理をしない、ごく自然な生き方を誉め称えているのである。そうしてその生き方は、「虚」の一言で比喩的に述べられており、「虚」であるがゆえに尊いのであるという。では、なぜそのような生き方が尊重されるのであろうか。それはここに引いた文章の末尾にも述べるように、「虚」が万物の根源であるからにはかならない。なお「虚」が万物の根源であるというのは、旧注以来のつぎのような解に由っているのである。

○有形は無形より生ずるなり。(有形生於無形也) Ⅱ 尹知章注)

つまり、「無形」から「有形」が生じたという。そうして、この「無形」ということを「虚」とみなし、こうした形の無い世界から、形体をそなえた万物が生じたとした。ここでは「強に立ち」、「善につとめ、能にあじわい」、「ことに動く」というような凡人のおちいりやすい数々の不自然さの無い聖人の心ばえに、この「虚」を見たのである。そうして、この心のあり方が、万物の根源が万物を生ずるその生じ方に則るものとして、ここでは称揚されているのである。

万物つまり物一般は、このように「虚」と形容されるところの、「無形」の世界より生まれたとされているのである。この「無形」について、『管子』の書の述べるところにしたがって、さらに見ていくように思う。

○凡そ萬物は、陰陽兩生して參(視)す。先王は其の參に因りて

二

入る所、出づる所を慎む。(凡萬物、陰陽兩生而參視、先王因其參、而慎所入所出) Ⅱ 『管子』卷四、樞言第十二)

このように、陰陽両気が合一することによって、第三の、いわゆる「物」、つまり「万物」が生じたのであると、ここではいう。したがって「万物の根源が虚である」というさまの『管子』の本文と重ね合わせることによって、この「虚」つまり「無形」は、陰陽二氣のままの、「物」以前の「氣」の状態をさしているのだということが明らかとなるであろう。したがって、「物」とは、無形の「氣」が、しかもそれは陰陽二氣なのであるが、それらが合うことによって形を持つところの「物」になるというのが、一般的な考えであったのであるということがわかる。これはいうまでもなく、陰陽思想が流行しはじめた戦国時代後期、つまり西暦紀元前三世紀以降における「物」の成立についての見方を、反映しているのである。「物」と「氣」とのこのような関係については、この「物」を具体的なものとして明示してあげている以下のような文章によって、そのほかの諸々の事情とともに、さらに明らかになるであろう。

○凡そ物の精、此れ則ち生を爲す。下は五穀を生じ、上は列星と爲る。天地の間に流(し)く、之を鬼神と謂ふ。胸中に藏ず、之を聖人と謂ふ。是故に民氣(このき)杲乎として天に登るが如く、杳乎として淵に入るが如く、渟乎として海に在るが如く、卒乎として己れに在るが如し。是の故に此の氣や、止むるに力を以てすべからずして、安んずるに徳を以てすべし。呼ぶに聲を以てすべからずして、迎ふるに意を以てすべし。敬守して失ふ勿き、是を成徳と謂ふ。徳成りて智出で、萬物果(ことごと)

く得。(凡物之精、此則爲生、下生五穀、上爲列星、流於天地之間、謂之鬼神、藏於胸中、謂之聖人、是故民氣杲乎、如登於天、杳乎如入於淵、淖乎如在於海、卒乎如在於己、是故此氣也、不可止以力、而可安以德、不可呼以聲、而可迎以意、敬守勿失、是謂成德、德成而智出、萬物果得。『管子』卷十六、内業第四十九)

この文章の冒頭の「物の精」における、「精」については、以下のような解釈がある。

○物の精とは、陰陽二氣なり。推してこれを原ぬれば、これを道と謂ふ。凡て物はここより生ずるなり。(物之精、陰陽二氣也、推而原之、謂之道、凡物生於此。『管子纂詁』)

ここにも述べるように、やはり「物」は陰陽二氣によって生じているとされるのであるが、その「物」は具体的には以下のごとくである。地上にあるものでは五穀があげられており、天上では多くの星もまた、「物」の一つとされるのである。さらに、天と地との間には、「鬼神」が存在しているという。この「鬼神」のあり方については、ここに引いた本文では「天地の間に流(し)く」とあらわされている。水などの液体が流れるようにして、形があつて無きがごとくき微妙なあり方が、この「鬼神」には与えられている。こうした「鬼神」も『管子纂詁』によると、「陽を神といい、陰を鬼という」と述べられているように、やはり陰陽の氣に深く根ざしているのである。「氣」はここに述べているところから、「列星」に代表されている天を形作っており、五穀の名で象徴される地上の万物ともなっているとされていることがわかるであろう。そのため、この「氣」は、

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

「杲乎として天に登るが如く」といわれるように、高く天にまで上昇することができる。また「杳乎として淵に入るが如く」とあるように限りなく地下深くまで下降するのである。さらに「淖乎として海に在るが如く」というように、その性質として海の水などのようなところがある。のちに章を改めてふれることになるが、「氣」の水との類似性には、大きな注目がはらわれなければならないのである。水が蒸気となってどこまでも上昇し、地下水が深くしみ透り、海原がはてしなく広がるように、「氣」もまたあるというのである。この「氣」は最後に、「卒乎として己(おのれ)にあるがごとし」ともいつているように、おのれ、つまり人間の身にも入りこみ、人間の心身をもかたち作っているとされているのである。こうして「氣」は天地に遍在し、天・地・空間にある「物」として、形をとっているのである。このことを『管子』の書では、以下のごとく述べている。

○天の裁は大、故によく萬物を兼覆す。地の裁は大、故によく萬物を兼載す。(天之裁大、故能兼覆萬物、地之裁大、故能兼載萬物。『管子』卷二十、形勢解第六十四)

こうして「氣」のあるところに、「万物」が存在しているのである。まず、「物」について、基本的には、以上のことを『管子』の書では述べているのである。

2 形と名

「物」の成立については、すでにこれまで見てきたごとくである。その「物」の多くの属性のうち、「形」ということや「名」というようなことなどが、戦国諸子のあいだで問題とされた。『管子』の書に

『管子』における領水思想をめぐって (久富木成大)

において、そのことを以下にみていこう。

○天の道は虚にして其れ形なし。虚なれば則ち屈せず。形なければ則ち位の赶する所なし。位の赶する所なし、故に徧く萬物に流れて變ぜず。(天之道、虚其無形、虚則不屈、無形則無所位赶、無所位赶、故徧流萬物而不變) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

さきに述べた「物」の始め、つまり陰陽の「氣」の始動の時のことを、ここでは「道」といつている。これを、前に見たところでは「虚」といつていた。そうして、その「虚」のときにはまだ「物」には、「形」がない。ここでは、そういつている。固定した「形」がないからこそ、万物の中に自由に入り込むのであるという。では、そうした「形」とは何であろうか。

○徳は道の舍にして、物得て以て生ず。生知以て職を得るは、道の精なり。故に徳は得なり。得なる者は、其の得て以て然る所を謂ふなり。無爲を以てする之を道と謂ふ。之に舍る、之を徳と謂ふ。故に道の徳における、間なし。故に之を言ふ者、別たざるなり。間の理は、その舍るゆえんを謂ふなり。義は、おのおの、其の宜しきに處るを謂ふなり。禮は人の精に因り、義の理によりて、之が節文を爲す者なり。故に禮は、理あるを謂ふなり。理なる者は、分を明にして以て義を諭すの意なり。故に禮は義より出で、義は理より出づ。理は宜しきに因る者なり。(徳者道之舍、物得以生、生知得以職、道之精、故徳者得也、得也者其謂所得以然也、以無爲之謂道、舍之、之謂徳、故道之與徳無間、故言之者不別也、間之理者、謂其所以舍也、義者、

謂各處其宜也、禮者因人之精、緣義之理、而爲之節文者也、故禮者謂有理也、理者、明分以諭義之意也、故禮出乎義、義出乎理、理因乎宜者也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

ここでいう「道」とは、前に引いた文章でいう「天の道」、つまり「虚」のことである。この「道」が、そこに「舍(やど)」ついているところのものが、「物」であると、ここではいう。そうして、そのやどり方が問題であるというのである。つまり、そのやどり方が非常に堅固でなければならぬ。陰陽二気が固くむすびついて完全に一体化し、そこに少しの間隙もないような状態になったものを「道」があるともいい、また「義」つまり「宜(よろこ)しいことと、ここではいつている。では、こうした「義」の状態には、いかにすればなりうるであろうか。

○天を虚と曰ひ、地を静と曰ふ、乃ち伐たず。其宮を潔くし、其門を開き、私を去りて言ふこと母ければ、神明若(したが)ひ存す。紛乎として其れ亂るが若し。之を静にせば、自ら治る。(天曰虚、地曰静、乃不伐、潔其宮、開其門、去私毋言、神明若存、紛乎其若亂、静之而自治) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

天の道は「虚」であるが、それに対応し、したがった、地のあり方は「静」ということばであらわされる。そうして、その「静」であれば「自(おのずか)ら治まる」と、ここにいう。つまり、あらゆる意味で静かにしていると、自然に、さきに言及した陰陽の二気が堅固にむすびついた「義」の状態になり、「物」が確立するというわけである。では、その「静」というのは具体的にはいかなること

として、『管子』の書のなかでは意識されているのであろうか。

○有道の君は、其の處るや、知るなきが若し。其の物に應ずるや、之に偶するが若し。靜因の道なり。(有道之君、其處也、若無知、其應物也、若偶之、靜因之道也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

天の道を体得している君子、つまり「聖人」といいかえてもよいが、こうした人々は、ここにいうように、「物に應ずる」ということをする。そうして、そのことはまたここに述べるような、「靜かにしていて因る」ということと、不可分のことであるのである。この「応」と「因」とのかかわりについて、しばらく見ていきたい。

○應なる者は、吾が設くる所にあらず。故に能く宜なきなり。顧みざるは因を言ふなり。因なる者は、吾が顧みる所にあらず。故に顧みる無きなり。口に出さず、色に見(あらは)さず、形なきなり。四海の人、孰れか其の則を知らんとは、深圍を言ふなり。(應也者、非吾所設、故能無宜也、不顧言因也、因也者、非吾所顧、故無顧也、不出於口、不見於色、無形也、四海之人、孰知其則、言深圍也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

ここにあらわれているように、「応じる」ということは、自分の主観を予め設けることのないことをいう。そうして、「因る」の方は、「応」のままでありゆきに身をまかせていくことに外ならない。このように「応」と「因」とは結局のところ、虚心になることと、虚心になって現実にしたがうことを指すのであると考えてよい。「口に出さず、色にあらはさず、形なきなり」と、ここにそのさまをいう。これはまた、前述の「靜」にも通じるところの生き方でもある

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

のであるが、こうであってこそ対象をいささかも損うことがない。そうして、対象の「義」が確立される。つまり、陰陽二気が間隙なく堅固にむすびつくのである。このように人為を排しきったところに、「物」が「物」として確立されるのである。このことを完全に実行することのできる人物を聖人というのであるが、そのような聖人のこととしての「応」と「因」とによって、「物」について以下のような展開がある。

○不言の言は應なり。應なる者は、其の之を爲すの人を以(もち)ふるなり。(不言之言應也、應也者、以其爲之入者也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

「不言の言は応なり」と、ここに述べられていることに注目しなければならぬ。これは「己むを得ずして之に応ず。言うといへども、猶ほ言はざるがごとし」と解されているように、きわめて控えめで、目立たない行為である。そうして、さらにその行為は、「そのこれをなすの人をもちうるなり」というように、可能なかぎり自分で直接手をくださないようにし、他人を働かせるのである。このことは、主観を排するという態度を、つまり、自己の行為を可能な限り客観化するということを比喩的に述べているのである。このような行為に関連して、『管子』の本文ではまた「感じてしかる後に応ず」と述べている。ここで「感ずる」というのは、「物」からの対応を受け入れることを、比喩していつているのであり、「物」が鏡に写るように、「物」の働きに応じて行為することという。主観を排して客観につくための、こうした慎重な行為によって、対象が初めて「物」として完全な状態で把握されることになる。そのことは、結局のと

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

ころ、「物」が「形」をそなえることであるのである。

○口に出さず、色に見(あらは)さずとは、形なきなり。(不出於口、不見於色、無形也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

この文章は、すでに先に見てきたところであるが、重ねてここにかかげたのは、「口に出さず、色にあらわさず」という主張を排することが、その「物」の「形」を、意図的に作り出さないことであるのだという、この主張を確認したかったからにはかならない。これまで述べてきたことを総合すると、「虚」つまり、「応」と「因」とによって、「物」そのもののあり方、つまり「形」がとらえられ、「物」ははじめて「形」を持つのであるということになる。では、「物」が「形」を有することによって、「物」をめぐっていかなることが新たに起こるのであるだろうか。以下に見ていこう。

○其の名を執り、其の應を務むるは、之を成す所以にして、應の道なり。無爲の道は因なり。因る者は、益なく損なきなり。其の形を以て、因りて之が名を爲すは、此れ因の術なり。名は聖人の萬物を紀する所以なり。(執其名、務其應、所以成之、應之道也、無爲之道因也、因也者、無益無損也、以其形、因爲之名、此因之術也、名者聖人之所以紀萬物也) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

「形」が定まれば、その「形」にそって、その「物」の「名」が与えられる。ここに今、「形」にそと表現したのは、「因るものは、益なく損なきなり」という文章にもとづいてである。「形」に「名」が与えられるのも、やはり前述の「虚」にしたがった行為であるのである。このことをまた『管子』の別のところでは、「因なる者は、

己を捨てて、物を以て法と爲す者なり」といっている。こうして「物」には、「形」と「名」とがあることになる。この「形」と「名」との関係について、『管子』の書では以下のように述べている。

○物もとより形あり、形もとより名ありとは、此れ實に過ぐるを得ず、實、名を延すを得ざるを言ふなり。姑らく形(あらは)すに形を以てし、形を以て名を務め、言を督(ただ)しくして名を正しくす。故に聖人と曰ふ。(物固有形、形固有名、此言不得過實、實不得延名、姑形以形、以形務名、督言正名、故曰聖人) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

「物」には固有の「形」と「名」とがあると、ここにはいう。ところが、現実には「名」が「形」の実体をはなれていることがあり、これを解決し、正しい状態におくのが、ここにいのように聖人に課せられた任務であると、一般にされているのである。しかし、「物」の「形」をめぐっての、「名」とその現実の働き、つまり「実」との関係への対応の仕方は、多様で複雑な様相を呈していた。『管子』の書における、その問題については、章を改めて論じなければならぬ。

二 水

1 水とは何か

万物の構成要素である「氣」のあり方を水のことによせて、「沓乎として淵に入るがごとく」とか、あるいはまた「渟乎として海に在るがごとし」などと『管子』の書では述べることのあること

は、すでに前の章において見てきたごとくである。

「氣」および「氣」のあり方に、水を関係させ、水のこととして理解しようとする仕方は、このことにのみ注目するかぎりにおいては唐突の感をまぬかれない。しかしながら、「氣」が万物の根源であるという考えが一方にあったことと、水に対する以下のような評価があったことを並べて考えるとき、前述のごとく、「氣」のことを水にことよせて説くとき方は、少しも不自然なものではないということがわかるであろう。

○地は萬物の本原、諸生の根苑なり。美惡・賢不肖・愚・俊の生ずる所なり。水は地の血氣、筋脈の流通の如き者なり。故に曰く、水は材を具ふるなりと。何を以て其の然るを知る。曰く、夫れ水は淖弱として以て清く、而して好んで人の惡を灑ふは仁なり。(地は萬物之本原、諸生之根苑也、美惡賢不肖愚俊之所生地、水者地之血氣、如筋脈之流通者也、故曰、水具材也、何以知其然也、曰、夫水淖弱以清、而好灑人之惡、仁也) 『管子』卷第十四、水地第三十九)

まず、「地は万物の本原、諸生の根苑」であると、いう。それにもかかわらず、「地」がそのような働きをするのに不可欠のものがあり、それはここにもいうように「水」にほかならない。そのことは地と水との関係を、ここでは人体と血液とになぞらえて述べていることよって明白となるであろう。水が、このように大きな働きをするのは、その「淖弱」つまり形が定まっておらず、柔弱であることによるのである。さきに第一章でふれ、この章の冒頭にも引いた、「淖平として海に在る云々」の表現を、我々はここでまた想起しなければ

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

ばならない。性として限りなく柔らかく、決まった形を、水は持たない。だからこそ人体に血脈がどこまでも通じ、血液がそこを自由にめぐり、肉体が養われ維持される。「物」と「水」はこのように人体と血液との関係のようにしてあり、万物が作られる。

○準なる者は五量の宗なり。素なる者は五色の質なり。淡なる者は五味の中なり。是の以(ゆえ)に水は萬物の準なり。諸生の淡なり。違非得失の質なり。是の以に満たざるなく居らざるなきなり。天地に集り萬物を藏し、金石を産し、諸生に集る。故に曰く、水は神なりと。草木に集まれば、根その度を得、華その數を得、實その量を得。鳥獸これを得て形體肥大、羽毛豊茂、文理明著。萬物其幾を盡し、その常に反らざる莫き者は、水の内度適すればなり。(準也者、五量之宗也、素也者、五色之質也、淡也者、五味之中也、是以水者、萬物之準也、諸生之淡也、違非得失之質也、是以無不滿、無不居也、集於天地、而藏於萬物、産於金石、集於諸生、故曰、水神、集於草木、根得其度、華得其數、實得其量、鳥獸得之、形體肥大、羽毛豊茂、文理明著、萬物莫不盡其幾、反其常者、水之内度適也) 『管子』卷十四、水地第三十九)

「天地に集まり、万物を藏し、金石を産し、諸生に集まる」と、ここにいる。草木鳥獸のように生命あるものにも、金石のように無生物にも、水は入りこみ、その入りこんだものを、「物」としてなりたたせている。水のこのような現象、あるいは働きを、はたまたその性質を称賛して「水は神なり」と、右に引いた文章ではいう。こうした「神」であることの象徴として、水について、『管子』の書で

『管子』における頌水思想をめぐる (久富木成大)

は以下のような例をあげている。

○龜は水に生じ、之を火に發す。是に於て萬物の先と爲り、禍福の正と爲る。龍は水に生じ、五色を被りて遊ぶ。故に神なり。小を欲すれば則ち化して蠶蠋の如く、大を欲すれば則ち天下を藏す。尚きを欲すれば則ち雲氣を凌(し)のぎ、下きを欲すれば則ち深泉に入る。變化日なく、上下時なし、之を神と謂ふ。龜と龍と、伏聞能く存して能く亡ぶる者なり。(龜生於水、發之於火、於是爲萬物先、爲禍福正、龍生於水、被五色而游、故神、欲小、則化如蠶蠋、欲大、則藏於天下、欲尚、則凌於雲氣、欲下、則入於深泉、變化無日、上下無時、謂之神、龜與龍、伏聞能存而能亡者也) 『管子』卷十四、水地第三十九)

龜と龍とは「万物の先」となり、あるいは「變化日なく、上下時なし」とここにいう。變化して何物にもなることができ、天地四方に自由自在に移動することができる。まさに水の「神」として言及されるに足る、能力のすべてを具現しているのである。

一方ではまた、水は「神」に擬せられるようになすぐれたものにはかりなるのでは、もちろん無い。

○人は水なり。男女精氣合して、水形を流(し)く。三月にして如咀、咀とは何ぞや。曰く、五味なり。五味とは何ぞや。曰く、五藏なり。酸は脾を主(つかさど)り、鹹は肺を主り、辛は腎を主り、苦は肝を主り、甘は心を主る。五藏すでに具りて、而る後に肉を生ず。脾は隔を生じ、肺は骨を生じ、腎は腦を生じ、肝は革を生じ、心は肉を生ず。五肉すでに具りて、而る後に發して九竅と爲る。脾は發して鼻となり、肝は發して目となり、

八

腎は發して耳となり、肺は發して竅と爲る。五月にして成り、十月にして生る。生れて目は視、耳は聽き、心は慮る。目の視る所は、特(ただ)に山陵をこれ見るのみにあらざるなり。荒忽を察す。耳の聽く所は、特に雷鼓をこれ聞くのみにあらざるなり。淑湫を察す。心の慮る所は、特に麤粗を知るのみにあらざるなり。微妙を察す。(人水也、男女精氣合、而水流形、三月如咀、咀者何、曰五味、五味者何、曰五藏、酸主脾、鹹主肺、辛主腎、苦主肝、甘主心、五藏已具、而後生肉、脾生隔、肺生骨、腎生腦、肝生革、心生肉、五肉已具、而後發爲九竅、脾發爲鼻、肝發爲目、腎發爲耳、肺發爲竅、五月而成、十月而生、生而目視、耳聽、心慮、目之所視、非特山陵之見也、察於荒忽、耳之所聽、非特雷鼓之聞也、察於淑湫、心之所慮、非特知麤粗也、察於微妙) 『管子』卷十四、水地第三十九)

人間も例外ではない。やはりここにいうように、水によって出来ているといえるのである。人間は前述の龜や龍のごとく、「神」に比せられるほどのことはないけれども、目・耳・心という感覚の器官を持つており、それによって単なる現象のみに限られることなく、その奥にあるものを、ある程度は知覚することができる。このことが、人間が単なる「物」ではないことのアかしであるといつてよいであろう。右に引いた文章ではそのことを以下のごとく述べている。目は、ただ山や丘を見ることができただけではなく、荒忽、つまり、有るような無いような、極めて微妙な存在をも見る⑩ことができる。耳は、とどろきわたるような雷鳴だけを聞けるのではなく、淑湫と表現されているところの、極めて小さな、かすかな音をまで聞きわ

けることができる^③。心は、荒々しきの目立つ動きのみに感じるのではなく、微妙で限りなく細かな心のひだをも感じとるのである、と。しかし、こうした感覚の持つ能力の大小ということには個人的な差違があり、一般化した尺度ではその有無をいうことはできないのである。それは『管子』の書では、その地の水の性質が大きき力を持ち、それによって人間の能力に多くの差違が生ずるのであると述べるのであるが、水の持つ影響はこのようにはかり知れないものがあると、とらえられていたのである。そのことは、以下のような記述によって、容易におしはかることができるであろう。

○水とは何ぞや、萬物の本原なり。諸生の宗室なり。美惡賢不肖愚俊の産する所なり、と。何を以てその然るを知る。夫れ齊の水は道躁にして復す。故にその民貪羸にして勇を好む。楚の水は淖弱にして清し。故にその民は輕果にして賊なり。越の水は濁重にして洎、故にその民愚疾にして垢し。秦の水は汙最にして稽、淤滯して雜、故にその民貪戾にして罔、而して好く齊を事とす。晉の水は枯旱にして運り、淤滯にして雜。故にその民諂詐を葆ち、巧佞にして利を好む。燕の水は萃下にして弱、沈滯して雜。故にその民愚慧にして貞を好み、輕疾にして死を易（あなど）る。宋の水は輕勁にして清し。故にその民簡易にして正を好む。（水者何也、萬物之本原也、諸生之宗室也、美惡賢不肖愚俊之所産也、何以知其然也、夫齊之水、道躁而復、故其民貪羸而好勇、楚之水、淖弱而清、故其民輕果而賊、越之水、濁重而洎、故其民愚疾而垢、秦之水、汙最而稽、淤滯而雜、故其民貪戾罔、而好事齊、晉之水、枯旱而運、淤滯而雜、故其民

『管子』における領水思想をめぐって

（久富木成大）

諂諛葆詐、巧佞而好利、燕之水、萃下而弱、沈滯而雜、故其民愚慧而好貞、輕疾而易死、宋之水、輕勁而清、故其民簡易而好正。『管子』卷十四、水地第三十九

水が人間の感覚を形成する、大きな要素であり、そのことにあずかっている水の力が非常にはかり知れないものであるという『管子』の書に述べられている認識については、すでにさきに記したとおりである。ここでは、そうした限定された人間の能力についてばかりでなく、広い意味での国民性というようなものに至るまで、水が形作るものであると、述べられている。齊・楚・越・秦・晉・燕・宋の国々の国民性の多様さは、それらの国々の水の性質によって生じたものとして、ここにくわしく描きわけられている。

以上見てきたところによって、この最後の引用文の冒頭に「水とは何ぞや、万物の本原なり」と述べられていることの意味が明白となってきたであろう。そうして、第一章において「氣」が万物の根源であると見なされていたことをもまた、ここで思い起こさなければならぬ。それによって、水にこめられた人々の思いの重さが、よく理解されるはずである。

2 水と政治

『管子』の書における、水によって万物が出来ているという見方を、前節においてみてきた。しかしこのような主張は、単にこのことのみが目的であるのではなく、あくまで政治の問題として意識され、提起されているのである。

まず、政治を行う場所としての都市の、地相あるいは地勢と水とのかかわりという点から見ていきたい。

『管子』における領水思想をめぐって (久富木成大)

○昔者桓公、管仲に問ひて曰く、寡人請問す。地形を度りて國を爲(をさ)むる者は、其れ何如にして可ならんかと。管仲對へて曰く、夷吾の聞く所、能く霸王たる者は、蓋し天子の聖人なり。故に聖人の國を處く者は、必ず不傾の地に於てして、地形の肥饒なる者を選ぶ。山を郷(お)ひ、經水もしくは澤を左右にす。内、落渠の寫をつくり、大川に因りて注ぐ。乃ちその天材地の生ずる所を以て、その人を利養し、以て六畜を育す。天下の人、皆其德に歸して其義に惠(したが)ふ。(昔者桓公、問管仲曰、寡人請問、度地形而爲國者、其何如而可、管仲對曰、夷吾之所聞、能爲霸王者、蓋天子聖人也、故聖人之處國者、必於不傾之地、而擇地形之肥饒者、郷山、左右經水若澤、内爲落渠之寫、因大川而注焉、乃以其天材地之所生、利養其人、以育六畜、天下之人、皆歸其德、而惠其義』『管子』卷十八、度地第五十七)

都市には、「山をおい、經水もしくは沢を左右にす」と、ここにはいう。山から水が流れ出て都市をめぐって川があり、または沼沢の地が都市のまわりになれば、都市は管めないといっている。都市が生活の場でもある以上、生活用水の供給源としての川や湖水がなければならぬというのには当然のことである。しかしながら、ここに述べられている「經水」や「沢」は、そのような生活上の必要からばかりではない。非常に大きな、別の目的がそこにはこめられてもいるのである。以下にそのことについて、見ていきたい。

○善く國を爲むる者は、必ず先づその五害を除けば、人乃ち終身患害なくして孝慈なりと。桓公曰く、願はくば五害の説を聞か

んと。管仲對へて曰く、水は一害なり、旱は一害なり、風霧雹霜は一害なり、厲は一害なり、蟲は一害なり。此を五害と謂ふ。五害の屬、水最も大なり。五害すでに除かば、人乃ち治むべしと。桓公曰く、願はくば水害を聞かんと。管仲對へて曰く、水に大小あり、又遠近あり。水の山より出で、流れて海に入る者を命(なづ)けて經水と曰ふ。水の他水より別れて、大水および海に入る者を命けて枝水と曰ふ。山の溝、一は水あり一は水なきを命けて谷水と曰ふ。水の他の水溝より出で、大水および海に流れる者を命けて川水と曰ふ。地を出でて流れざる者を命けて淵水と曰ふ。此五水は其利に因りて之を往かしめて可なり、因りて之を扼して可なり。而して久しからずんば常に危殆ありと。桓公曰く、水、扼して東西南北し及び高からしむべきかと。管仲對へて曰く、可なり。夫れ水の性は高きを以て下(ひく)きに走れば、則ち疾くして石を漂はすに至る。而して下きより高きに向はば、即ち留りて行かず。故に其の上領を高くして之を砥(れい)す。尺に十分に三あり、里四十九に滿つる者は、水走らすべきなり。乃ち其道を迂にして之を遠くし、勢を以て之を行(や)る。水の性行きて曲に至れば必ず留退し、滿つれば則ち後、前を推す。地ひくければ則ち平行し、地高ければ則ち控(や)む。曲を杜(ふさ)げば則ち擣毀し、曲を杜ぎて激すれば則ち躍る。躍れば則ち倚り、倚れば則ち環り、環れば則ち中し、中すれば則ち涵(しづ)む。涵めば則ち塞り、塞れば則ち移り、移れば則ち控み、控めば則ち水妄行す。水妄行すれば則ち人を傷け、人を傷くれば則ち困(くる)し)み、困めば則

ち法を輕んず。法を輕んずれば則ち治め難く、治め難ければ則ち不孝、不孝なれば則ち不臣なり。(善爲國者、必先除其五害、人乃終身無患害、而孝慈焉、桓公曰、願聞五害之說、管仲對曰、水一害也、旱一害也、風霧雹霜一害也、厲一害也、蟲一害也、此謂五害、五害之屬、水最爲大、五害已除、人乃可治、桓公曰、願聞水害、管仲對曰、水有大小、又有遠近、水之出於山而流入於海者、命日經水、水別於他水、入於大水及海者、命日枝水、山之溝、一有水、一母水者、命日谷水、水之出於他水溝、流於大水及海者、命日川水、出地而不流者、命日淵水、此五水者、因其利而往之可也、因而扼之可也、而不久、常有危殆矣、桓公曰、水可扼而使東西南北、及高乎、管仲對曰、可、夫水之性、以高走下、則疾至於漂石、而下向高、即留而不行、故高其上領、以勢行之、水之性、行至曲必留退、滿則後推前、地下則平行、地高則控、杜曲則擣毀、杜曲激、則躍、躍則倚、倚則環、環則中、中則涵、涵則塞、塞則移、移則控、控則水妄行、水妄行、則傷人、傷人則困、困則輕法、輕法則難治、難治則不孝、不孝則不臣矣。『管子』卷十八、度地第五十七)

ここには古代中国における水理学の粹ともいえる見解が散見されるのである。しかし今は我々の主題にそのことをのみ考えていかなければならない。では、『管子』の書では、水のなかにいかなる政治の様相を見出しているのであろうか。

水は人間にとって利をもたらすばかりではない。ここに述べるように、「水害」というものがある。水はその性として、高い所から低

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

い場所へと流れていく。この流れが甚だしい場合には、ここにもいのように「石を漂わせる」というほどの、激しい力を水は發揮する。政治の上でさわりになる五害として数えあげられる害毒があるが、それらの中では水害が最も大きいという。国都の内にある、ここに列挙されている「經水」・「枝水」・「谷水」・「川水」・「淵水」の水を治めることを怠り、あるいは誤るようなことがあれば、水はそのエネルギーを爆発させる。そうしてここにいう「妄行」をきたし、その結果、堤防の決壊がおこり、人民の生活に大きな混乱と苦しみをもたらす。一たびそのようなことがおこれば、人民は国法を無視し、政權を認めなくなる。こうなると、国家の安定が根本からゆらぐことになるのである。一方、為政者が水の持つエネルギー、つまり「勢」を十分に制御しえたときには、人民は水の利を得て生活も安定し、法に従って政治も破綻なく運営される。水のエネルギーを治めることが、実はとりもなおさず、民のエネルギーを政治的に整えることであるということをも、『管子』の書では教えてくれているのである。

都市に配せられた川水は、政治の要諦を支配者に教え、同時にまた川水そのものが政治の具ともなるのである。以下にそのことについてみていこう。

○故に五害の屬、傷殺の類、禍福同じ。此の五者に備ふるを知らば、人君は天地なりと。桓公曰く、五害に備ふる道を請ひ問ふと。管子對へて曰く、請ふ、五害を除くの説は、水を以て始と爲さん。請ふ、爲に水官を置き、水に習ふ者をして吏とならしむ。大夫、大夫の佐各一人、率部、校長、官佐各財足る。乃ち水の左右各一人を取り、都匠水工とならしめ、之をして水道城

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

郭、隄川溝池、官府寺舍、及び州中の繕治すべき者を行(めぐ)らしめ、卒に財を給して足らしむ。(故五害之屬、傷殺之類、禍福同矣、知備此五者、人君天地也、桓公曰、請問備五害之道、管子對曰、請除五害之說、以水爲始、請爲置水官、令習水者爲吏、大夫、大夫佐各一人、率部、校長、官佐、各財足、乃取水左右各一人、使爲都匠水行、令之行水道城郭、隄川溝池、官府寺舍、及州中當繕治者、給卒財足。『管子』卷十八、度地第五十七)

水の持つ勢、つまりエネルギーの制御ということに政治の要諦と、政治そのもののモデルとがあるというのが『管子』の書の見解である。だからここにもいうように、「水官」をおき、その下に「水に習う者」^⑤、つまり治水技術に通じた人物を配置して実事にあたらせ、治水機構を組織化するのである。こうして恒常的な治水対策が、現実の政治そのものと一体化して確立する。そこにはじめて強力で安定した政治権力と政治機構とが実現することになる。このことについて、『管子』の書では以下のように述べている。

○蛟龍は水蟲の神なる者なり。水に乗ずれば則ち神立ち、水を失へば則ち神廢す。人主は天下の威ある者なり。民を得れば則ち威立ち、民を失へば則ち威廢す。蛟龍は水を得るを待ちて、而る後に其神を立て、人主は民を得るを待ちて、而る後に其威を成す。故に曰く、蛟龍水を得て神立つべきなりと。(蛟龍、水蟲之神者也、乗於水則神立、失於水則神廢、人主、天下之有威者也、得民則威立、失民則威廢、蛟龍待得水、而後立其神、人主待得民、而後成其威、故曰、蛟龍得水、而神可立也。『管子』

卷二十、形勢解第六十四)

「水」に乗じて、はじめて神に比せられるほどの力を發揮する龍が、政治のあらゆる側面の理想を反映している。ここに政治の出発点と到達点とを、『管子』の書では見ているのである。これは結局のところ、水害防備の組織化により水の「勢」を治め、それに乗じて、「法」にしたがって民の力を整えるところに、初めていたることのできる場所であると見なされているのである。

三 宇宙構造

1 天地と水

第二章で述べたように、政治の場である都市は「山を帯び、経水もしくは沢」を左右においていたのであった。そこには「経水」・「枝水」・「谷水」・「川水」・「淵水」の、いわゆる五水が網の目のようにはりめぐらされているのが理想とされたのであった。こうした状況は、かなりの程度にまで当時の現実を反映しているのであるが、川をめぐっての事情をいわゆる「世界」の規模にまで広げて、『管子』の書ではつぎのように述べている。

○桓公曰く、地數聞くを得べきかと。管子對へて曰く、地の東西二萬八千里、南北二萬六千里、其水を出す者八千里、山を受くるもの八千里。(桓公曰、地數可得聞乎、管子對曰、地之東西二萬八千里、南北二萬六千里、其出水者八千里、受山者八千里。『管子』卷第二十三、地數第七十七)

ここで「水を出すもの」というのは、山のことである。^⑥山から水

が流れ出て川となり、その川の長さは、合計すると八千里にもなるという。「世界」の地の東西および南北の規模が、ここに述べられているようにそれぞれ二万八千里と二万六千里であることからすれば、流水のそこに占める長さは相当にながしいというべきであろう。

さて、こうした川は、主流である「経水」をはじめとして、あるいはそこを経て、最後にはそのほとんどが海に流れこむのである。

○海は水を辭せず。故によくその大を成す。(海不辭水、故能成其

大) 『管子』卷二十、形勢解第六十四)

「世界」を形成する東西南北の「地」、つまり天空の下には、地をぬって流れている河川ばかりではなく、それら多くの川の水を、それこそ昼夜をおかず受け入れつづけているところの、広大きわまらない海がある。では、こうした川や海の水は、さいごにはどのような見られていたのであろうか。

○河海のごとく、終れば則ち始るあり。(若河海、終則有始) 『管子』卷二十四、輕重丁第八十三)

河川も海も、「終れば則ち始まる」とここではない。これは結局のところ、川と海とのあいだにある、ある種の循環性について述べているのであると見てよい。では、そこで何が循環し、なぜ循環するのであろうか。それについての解答はいくつもあるかも知れない。それらのうちの一つにあたるものであろうが、『管子』の書では以下のごとくとらえられているのである。

○春三月……天氣下り、地氣上り、萬物交通す。……夏三月

に當り、天地の氣壯に、大暑至り、萬物榮華、……秋三月に當り、山川百泉踊り、降雨下り、山水出で、海路距(へだた)

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

り、雨露天に屬し、地に溲洩あり。……冬三月に當り、天地閉藏、暑雨止み、大寒おこり、萬物實熟し、……春三月……天氣下、地氣上、萬物交通、……當夏三月、天地氣壯、大暑至、萬物榮華、……當秋三月、山川百泉踊、降雨下、山水出、海路距、雨露屬天、地溲洩、……當冬三月、天地閉藏、暑雨止、大寒起、萬物實熟、……『管子』卷十八、度地第五十七)

春夏秋冬、四季それぞれにおいて天の「氣」と地の「氣」、つまり陰陽の「氣」が交流する。そうして、そのことによって万物が生育し、消滅する。このうち地からのぼる「氣」こそは、河川や海からのぼるところの「氣」が主体となる。これは感覺的には、「水蒸気」としてとらえられるであろう。そして、この「水蒸気」はやがて「雨」として地上に降りそそぎ、その雨は、前述の引用文の「其の水を出すもの」、つまり山に受け入れられる。それから、その山から流れ出た水は、「水を受くる者」とこの章の冒頭の引用文で表現されているところの河川に入る。そうしてその川は、ついにまた海に注がれるのである。そこでさきという「(河海)終れば則ち始まる」という、水の、いわば天を媒介としての、大きな循環が行われるのである。こうした循環の過程を巨視的にながめた場合、ある意味で天も、天と地の間も、地も、水気で満たされた状態を呈するのであるということもできるであろう。これは地上のあらゆる河海から水蒸気ももうと立ちこめ、それによって天地がつつみこまれた状態を想起すればよい。これが極限にまですすんだのがここに『管子』から引いた、「秋三月」の様子に外ならない。それによると、「(秋の三ヶ月

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

間は天地の気の交流が激しくなり) 山々から流れ出る川や多くの泉も水量が増す。大雨が降り、山津波もおこり、(洪水のため)水はけも悪くなり、冠水の地域も広く生ずる。こうして秋雨が降りつつくことよって、いたるところが湿気におおわれ、ついに天と地が一つにとけ合ったかのような状態となる^⑧、と。この「秋三月」の例は極端なものとしてあげたのであるが、天と地とが水にとけあつて、一かたまりの存在となつてゐる、あるいはなる可能性があるのだという認識は、『管子』の書においてはいろいろなかたちをとつて、しばしばいいあらわされている。

第二章の冒頭でもすでにふれたように、『管子』の書で述べられている「氣」の概念には、多く「水」のイメージが寓せられている。そのため、「氣」が、時には「水」そのものとして意識され、とらえられていることのあることも、不思議ではない。それは、第一章で万物が陰陽二氣によつて生じたことと述べられていたことと、第二章では今度は水によつて万物が生じているのだといわれていたこととを並べあわせ、重ねあわせてみるによつても、首肯されるであろう。

2 宇宙構造

さきに第一章で、「物の精とは陰陽二氣なり。推してこれを原ぬれば、これを道と謂ふ。凡そ物はここより生ずるなり」という考えが、『管子』の書では述べられており、そうしたことがなりたつことを明らかにしておいた^⑨。また前節でみたように「水」と「氣」とがきわめて近いものとして、あるいはまた時には同一のものとしてとらえられる可能性のあることもみてきた。こうしたことを総合して考

えると、「氣」「水」とともに、「道」もまたそれらと同列のものとして考えられ、あつかわれうるものであるということが明らかとなつてくる。もちろんそれは『管子』の書のなかでのことであるが。そのため、天と地とは水で一体化しているものであるともいえるし、また「氣」の集合体であるともみなされ、さらに「道」によつて出来ているのだということも可能であろう。天地についてのこのような見方は、その素材についての具体的な物質をさがすことにはじまり、やがてその抽象的な原理の追求にまで到達したのだという、単なる思考の発展過程を示しているのではない。そこには一貫して存在している、一つの大きな思考の構造があつたのであり、それぞれの段階が、その思考の構造によつて支えられ、提起されているのであるといふところに注目が払われなければならない。では、そうした思考の持つ構造的な特色とはどのようなものであろうか。

○道は天地の間にあり、其の大、外なく、其の小、内なし。(道在天地之間也、其大、無外、其小、無内) 『管子』卷十三、心術上第三十六)

ここに見られるように、非常に大きな広がりをもって、この思考はなされているのである。まず、「道」(「氣」「水」)は、天地のないしは天地の間にあるのだという。しかし、その広がり、小という方向においても、大という方向においても、ともに限定しえないものであるという。つまり、大というその拡大性についていえば、「道」のありかは天と地との間にも限定されることはないのだということになる。このように無限定とはいひながらも、「道」のひろがりについて、現実にはどのような規模にまで拡大して、『管子』の

書では考えているのであろうか。このことは、ことばをかえれば、『管子』の書における想像力の限界、ないしはその構造はどのようなものであるかというようなことを問うことと同じことになるのである。このような立場から、以下のごとくみていきたい。

○天地は萬物の橐(たく)なり。宙合はまた天地を橐す。天地は萬物を直(す)す。故に曰く、萬物の橐と。宙合の意は、上(かみ)天の上に通じ、下(しも)地の下に泉し、外(ほか)四海の外に出で、天地を合絡して一裹となし、これを散じて無間に至り、名(なづ)くべからずして止むと。是れ之を大にして外なく、之を小にして内なし。故に曰く、また天地を橐すと。其の義つたはらず。一なれば典品の極らざるあり、一を薄(うす)んずれば然り而して典品治るなし。多く内れば富み、時に出せば當る。聖人の道は富みて以て當るを貴ぶ。奚をか當と謂ふ。無妄の治を本とし、無方の事を運し、變に應じて失はず、之を當と謂ふ。變至らざるなく、應當あるなく、本錯も敢へて忿らず。故に言つて之を名けて宙合と曰ふ。(天地萬物之橐也、宙合有橐天地、天地宜萬物、故曰、萬物之橐、宙合之意、上通於天之上、下泉於地之下、外出於四海之外、合絡天地、以爲一裹、散之至于無間、不可名而止、是大之無外、小之無内、故曰、有橐天地、其義不傳、一典品之不極、一薄、然而典品無治也、多内則當、時出則當、聖人之道、貴富以當、奚謂當、本乎無妄之治、運乎無方之事、應變不失、之謂當、變無不至、無有應當、本錯不敢忿、故言而名之曰宙合)『管子』卷四、宙合第十一)第一章で「天……………万物を兼覆す。地……………よく万物を兼載す」

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

(『管子』卷二十、形勢解第六十四)と述べたように、天地は万物をおおい、載せていたのであった。このことを、ここでは天地は万物を容れている橐(たく)、つまり袋であると表現している。そうしてさらにこの袋を完全につつまこむ、より大きな袋があると、それを宙合と名づけている。この外側の袋は、ここに「上、天の上に通じ、下、地の下に泉し、外、四海の外に出ず」というような規模と構造とを持っているという。したがって、「万物」が天地という袋でつつまれ、その袋がまたそれより大きな袋でつつまれ、小さな袋とそれをつつんでいる大きな袋とのあいだには、十分な空間が存在していることになる。内側の小さな袋はこうして、外側の袋にすっぽりとつつまれ、その内部に浮いている形をとる。そのさまは、あたかも卵黄が白味の中にかび、それらが卵殻につつまれているのによく似ている。形態のことは以上のごとくであるが、ここで我々はつぎのような記述に注目しなければならぬ。つまり、外側の袋の材質が、「之を散じて無間に至り、名づくべからずして止む」といつていることに対してである。これは、尹知章の注にも「宙合の裹(うち)のことといっているように、外側の大きな袋をふくんで、その内側のことを全体的にいっているのである。そうして、そのような場所には、ここにいう「名づくべからざるもの」が、すべてに隙間なくしみとおっているのである。この「名づくべからざるもの」とは、すでに第一章でみてきたように、実は「氣」の世界の次元のこと、あるいは「道」の世界のこととすることができるのである。こうした点から考えると、内側の袋の世界は「物」の世界であり、内側の袋と外側の袋の間の空間は、「氣」や「道」の世界のことである

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

ということができよう。このような思考のモデルとなったのは、いうまでもなく、「物」と「水」との関係である。また、水蒸気が天地をとりまき、天地が水分でとけ合つて一つになっている状況も、やはりそのモデルとして考えてよいであろう。その意味で、内側の袋の世界は形而下の世界であり、その外と、外側の袋との内側の世界は形而上の世界ということになる。したがって、内側の袋の世界のことは一般の人間にも知覚可能である。しかし、その外側のこと、外側から袋の内側に「しみとおる」ようにして入りこんでいるものについては、凡人にはとらえることはできない。こうして「物」の世界と、「非物」の世界との、二つの世界が、これまで述べてきたように、大小二重の袋のかたちで、『管子』の書の中では想定されていたのだということが、明らかとなった。この「非物」の世界は、万物の根源を「水」にみる『管子』の書では、必然的なこととして、水にかかわりのある、いわゆる「異界」としてとらえられることが多いのである。このことについては、節を改めて以下にみていきたい。

3 異界と異物の世界

『管子』の書には、「水」にかかわりのある、不可思議な三種の妖怪が描かれている。蝮と慶忌と兪兒とがそれである。ここではまず、蝮と慶忌とについてみてみよう。

○或は世に見(あらは)れ、或は世に見れざる者は、蝮と慶忌とを生ず。故に涸澤數百歳、谷これ徙(うつ)らず、水これ絶えざる者には慶忌を生ず。慶忌は、其状人の若し。その長(たけ)四寸、黄衣をき、黄冠をかむり、黄蓋を戴き、小馬に乗り、好

く疾馳す。その名を以て之を呼べば、千里の外も一日に反報せしむべし。此れ涸澤の精なり。涸川の精は蝮を生ず。蝮は一頭にして兩身、その形蛇の如し。その長八尺、その名を以てこれと呼べば、以て魚鼈を取らしむべし。此れ涸川水の神なり。……或は世に見れ、或は見れざる者は蝮と慶忌となり。故人皆之に服して、管子これに則る。人皆之を有して、管子之をもちふ。(或世見、或世不見者、生蝮與慶忌、故涸澤數百歳、谷之不徙、水之不絶者、生慶忌、慶忌者、其状若人、其長四寸、衣黄衣、冠黄冠、戴黄蓋、乘小馬、好疾馳、以其名呼之、可使千里外、一日反報、此涸澤之精也、涸川之精者、生於蝮、蝮者、一頭而兩身、其形如蛇、其長八尺、以其名呼之、可以取魚鼈、此涸川水之神也……或世見、或不見者、蝮與慶忌、故人皆服之、而管子則之、人皆有之、而管子以之)『管子』卷十四、水地第三十九)

慶忌は人間と同じ形状で、身長は四寸、約十二センチメートル。黄衣を着用し、黄色の冠をかむり、黄色のかさをかざし、小さな馬に乗ってかけまわり、一日に千里を行き来することができる。蝮は一つの頭に、それぞれ八尺、約二メートル四十センチもある二つの蛇状の身体を持ち、魚やすっぽんを上手にとる。これらはそれぞれ水のかれた沢や、水のかれた川の精であるとされている。古い沢や古い川の底深く残存しているところの、水の精ともいうようなものである。そうして、これらについて右の文章では「あるいは世にあらわれ、あるいはあらわれざるもの」であるという。つまり、目にとらえることもできるし、とらえることのできないこともあるとい

うのである。これを出現することに見ることができ、しかもそれらを用いて働かせることができるのは管仲のみであると、ここで特に記している。このことには注目しなければならぬ。なぜなら、管仲のみがこれら水の精、あるいは妖怪ともいえるこれらの存在を、形としてとらえることができるということになるからである。そのうえで、はじめてそれらを利用することができるのである。

兪兒については以下のごとくである。

○桓公、北のかた孤竹を伐ち、未だ卑耳の谿に至らざること十里、闐然として止り、瞠然として視る。弓を援きて將に射んとす。

引いて未だ敢て發せず、左右に謂つて曰く、是の前人を見たるか。左右對へて曰く、見ざるなりと。公曰く、事それ濟(な)らざるか。寡人大に惑ふ。今者寡人、人のたけ尺にして人物そなはり、冠し、右は衣を祛(さしはき)み、馬前に走りて疾きを見たり。事それ濟らざるか。寡人大に惑ふ。豈に人の此の若き者あらんやと。管仲對へて曰く、臣聞く、登山の神、兪兒といふ者あり、たけ尺にして人物そなはる、霸王の君興りて、登山の神あらはる。且つ馬前に走りて疾きは、道(みちび)くな衣を祛(さしはき)むは、前に水あるを示すなり。右に衣を祛むは、右方より渉るを示すなりと。卑耳の谿に至る。水を贊する者あり、曰く、左方より渉らば、その深き冠に及ばん。右方より渉らば、その深き膝に至らん。もし右より渉らば、其大に濟らんと。桓公立ちて管仲を馬前に拜して曰く、仲父の聖、此のごときに至る。寡人の罪に抵るや久しと。管仲對へて曰く、夷吾之を聞く、聖人は無形を先知すと。今すでに形ありて而る

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

後に之を知る。臣は聖にあらざるなり。善く教を承くるなりと。

(桓公北伐孤竹、未至卑耳之谿十里、闐然止、瞠然視、援弓將射、引而未敢發也、謂左右曰、見是前人乎、左右對曰、不見也、公曰、事其不濟乎寡人大惑、今者、寡人見人長尺、而人物具焉、冠、右祛衣、走馬前疾、事其不濟乎、寡人大惑、豈有人若此者乎、管仲對曰、臣聞登山之神、有兪兒者、長尺而人物具焉、霸王之君興、而登山神見、且走馬前疾、道也、祛衣、示前有水也、右祛衣、示從右方涉也、至卑耳之谿、有贊水者、曰、從左方涉、其深及冠、從右方涉、其深至膝、若右涉、其大濟、桓公立拜管仲於馬前曰、仲父之聖、至若此、寡人之抵罪也久矣、管仲對曰、夷吾聞之、聖人先知無形、今已有形、而後知之、臣非聖也、善承教也) 『管子』卷十六、小問第五十一)

桓公がふと幻のようなものを見た。それは一尺くらいの小さな人物で冠をつけ、衣の右のすそをかかっていた。このような人物が、馬前を駆けぬけたので、桓公はおどろいて弓を射ようと身がまえたのであるが、その時はもうその姿は消えていたのである。そこで彼は家来たちに、そのようなものを見たかどうかたずねたが、誰も見えなかったと答えた。ところが管仲はそのようなものが実際に現れたのだとして、以下のように対応した。それは霸王の出現する前兆であり、兪兒と呼ばれる、登山の神であり、右すそをかかっていたのは前方に川があり、その川を右側から渡るべきであることを知らせてくれているのである。このように管仲は、桓公にこたえたのである。ここで兪兒は山の神であるとされてもいるにもかかわらず、なにゆえにこれが川のことによせて、管仲によって説明された

『管子』における頤水思想をめぐって (久富木成大)

のであろうか。それはこの章の冒頭で、山を、「その水を出す者」と述べていたことを想起することによって明白となるであろう。

ところで、管仲があたかも予言でもするがごとくに、兪兒の出現の理由を説いたのであるが、事実、それがそのまま現実のこととしての中とした。しかしここで問題としたいことはそのことではない。管仲に対してはともかくとして、桓公に対してだけは一瞬間だけ、兪兒の姿が見えたということである。他の家来たちの目には全然見えなかったのである。それはなぜであろうか。いうまでもなく、それは桓公が霸王、つまり聖人としての位置に、そのとき限りなく接近していたからに外ならない。一方、管仲であるが、彼の「聖人は無形を先知すと。今すでに形ありて而る後に之を知る。臣は聖にあらざるなり」という答えは、明らかに謙遜のことばである。管仲には、「その形」が見え、それと同時に兪兒をめぐる古来のいい伝えが頭にうかび、そのことを桓公に伝えたのであろう。

螭といい、慶忌といい、兪兒といい、いずれも常人にはその姿を見ることができない。それは、それらが現実の、「物」の世界を超えた、「氣」の世界の存在であるからに外ならない。あるいはまた、「水」の世界の存在ではなく、「水」の「精氣」の世界の存在であるからである。その意味で、異界の異物といてよい。また「妖怪」とも「動物妖怪」ともいうことができるであろう。これらは常凡をこえた霸王にして、わずかにその姿をかいま見ることができただけである。

「臣は聖にあらざるなり」と謙遜はしているけれども、『管子』の書のなかでは聖人としての位置を与えられている管仲にしてはじめて、これら異界の異物をはっきりととらえることができ、なおかつ

それらを働かせ、利用することさえできるのである。

おわりに

「虚」であつてはじめて、「物」の生成の根源とその過程にせまらうるのであるということを一章でみてきた。聖人のみがそこに至り、一体化できるこの「虚」というあり方は、また、「静因」という生き方によつてもいいあらわされるのであつた。自己をおさえ、忘れはて、ひたすらに対象に没入しえたとき、はじめて対象はその真の姿をあらわすのであつた。その姿が「形」であり、それを表現したものが「名」にはかならない。そつして、「形」と「名」とを持つ「物」には、そのあり方、つまり働きとしての「実」があつた。

『管子』の書においては、『物』の世界を一つの袋の中にある完結した世界と考え、それを「非物」とでもいえるところの、別の大きな袋がつつまこんでいるのであると考へてきた。これは当時における宇宙構造についての一つの見解を、そのままに反映したものである。そつして、その具体的なモデルとなつたのは、水蒸気のたちこめた大空と、その中に浮かんだようにして存在していると実感された、大雨によつてとけ合い、一体化した天地とであつた。これをさらににつつまつていへば、水蒸気の袋状の球体と、その内部に浮かぶ袋状の水の球体とである。すでに見てきたように、万物が水でできているという『管子』の書における主張は、このような宇宙構造に關しての見方の一部分をなしているのである。この世のことも、したがつて、すべて「水」に關連させ一体化させてみるることによつて

こそ、その秘密をにぎり、制御することもできるのであると、『管子』の書ではいふ。

○是の以(ゆえ)に聖人の世を化するや、その解は水にあり。(是以聖人之化世也、其解在水) 『管子』 卷十四、水地第三十九)

「虚」によって「物」の「形」をとらえることのできる聖人は、「形」のできる以前の段階までも見ることでできる人であった。ここに引いた文章にも明らかのように、聖人は「水」に対して、格別には透徹した認識を持つものとされているのである。その結果、水にかかわりのある、異能を持った、動物妖怪ともいえるような数々のものをも、聖人のみが「形」としてとらえることができる。そしてその働きを知ることができ、それを利用することもできる。これら妖怪は、一般の人間にとつては働き、つまり「実」のみはあつても、「形」はとらえられない。自然界にあつて、風が吹き、こだまがひびくのを、人が感じ、聞くようなものである。これら妖怪は、現実の世界のものではなく、異界からこの世に入りこんできたものである。だから「形」がない。「形」以前の世界を認知しうる聖人にして、それらにはじめて「形」と「名」とが与えられるのである。以上のことを一般化していえば、『管子』の書の成立の当時にあつた、「名」と「実」の対立の問題に関係してくる。このことについて、『管子』の書では以下のようにいふ。

○夫れ名實の相怨むや久し。是の故に絶えて交(まじはり)なし。惠者は其の兩守すべからざるを知り、乃ち一を取る。故に安くして憂なし。(夫名實之相怨久矣、是故絶而無交、惠者知其不可兩守、乃取一焉、故安而無憂) 『管子』 卷四、宙合第十一)

『管子』における領水思想をめぐって

(久富木成大)

『管子』の書ではこのように、名と実とは歴史上一致したためしは無いという。だから賢者はその両方をめざすことはしない。名をすてて、すすんで実の方をとるのだという。このようにここでは、名実不一致、実尊重の立場が主張されている。こうした立場にとつて、『管子』の書のなかで述べられている領水思想と、水の妖怪についての伝承とは、それを支える道具立てとして、非常に有効であつた。ここで妖怪たちは「実」、つまり働きのみあり、「形」つまり「名」の無い存在としてその役わりを与えられている。ここでは妖怪たちは水の精としてえがかれていたが、いわばこれは実のみあつて形や名の無い、多くの自然現象を象徴するものであろう。そして、こうした妖怪たちが存在しうるためには、さきに述べたような、水蒸気と水とをモデルとした、二重の袋からなる特殊な宇宙構造を必要としたのである。妖怪たちは、水の「気」の世界という、いわば異界から、現実の世界へ入りこんできたもので、水の働きは持つが、水の「形」は持っていないのである。これを一人知覚しうるとされる聖人をおして、はじめて「形」や「名」が与えられるのも、そのためである。自然現象そのものの存在の主張が容易で、多くの人々に受け入れられやすいように、聖人をまっしてはじめて確かなものとなる妖怪を持つてくることによって、ここで「実」ともいふべき「水の精」の働き、つまり「水」の働きの普遍性と、その価値とを同時に主張しえているのである。つまり、得がたく、あるか無きかも定かでない貴少なもののよりも、どこにもある、普遍的で手に入りやすいものということが、それだけで一つの大きな価値であるということとを主張しているのである。しかしながら、これはあくまで、古代

『管子』における頌水思想をめぐって (久富木成大)

中国における、名実についての多様な展開の、その一つの側面を示すものと解しておかれるべき性質のものであろう。

注

- ① 立於強以強毅自立。(安井息軒『管子纂註』)。
務於善・務彊也、勉彊於善。(『管子纂註』)。
未於能・未味也、玩味於材能。(『管子纂註』)。
動於故・故事也、動作於事故。(『管子纂註』)。
- ② 『管子集校』(上)191頁、および192頁における孫蜀丞の説により、この「視」をける。
- ③ この文章の解釈は、『管子集校』(上)192頁における郭沫若の説にしたがう。
- ④ 凡そ五穀は萬物の主なり。(凡五穀者、萬物之主也)『管子』卷二十二、國蓄第七十三)。
- ⑤ 渾乎、濡貌。『管子纂註』。
- ⑥ 卒乎猶忽然也、己身也、人氣即物之精。『管子纂註』。
- ⑦ 能無預度其宜也。『管子纂註』。
- ⑧ 『管子纂註』。
- ⑨ 感而後應。『管子』卷十三、心術上第三十六。
- ⑩ 『管子』卷十三、心術上第三十六。
- ⑪ 水比于神。一九八九年、北京經濟學院出版、趙守正撰『管子通解』下冊39頁。
- ⑫ 荒忽、空無著也。『管子纂註』。
- ⑬ 淑湫、淑清湛也、湫氣集散也、皆闌寂無聲之狀。『管子纂註』。
- ⑭ 微妙、皆細也。『管子纂註』。
- ⑮ 習水、習熟水利者也。『管子纂註』。
- ⑯ 『管子』度地篇の後半には、治水の組織と機構について詳しくのべている。なお、この問題については佐藤武敏『管子』に見える治水説(昭和四十四年十一月、吉川弘文館刊『中国古代史研究』第三)を参照のこと。

- ⑰ 出水、水的發源地、指山。下文「受水」、指江河。出水、受水、猶今言山脈河流。『管子通解』下冊421頁。
- ⑱ 原文「溱洑」を『管子通解』下冊213頁、注11により、「溱洑」に改めてよむ。「溱洑：凝合・聚結。原文為『溱洑』、据李哲明說校改。『天地溱洑』言天地呈凝合狀態」と撰者の趙守正はいふ。なお、ここでいふ李哲明の著書は『管子集校』22頁にあげる、『管子校義』(民國二十年排印)であると思われる。
- ⑲ 『管子』卷十六、内業第四十九の「物之精」についての『管子纂註』の解釈。「物之精、陰陽二氣也、推而原之、謂之道、凡物生於此」。
- ⑳ 有長而無本剝者、宙也。『莊子』庚桑楚篇。「悠久永遠でありながら本末始終の時間的な限定を超えていることを『宙』すなわち無限の時間という(福永光司『莊子』雜篇46頁)。
- ㉑ 中国古代の宇宙構造論のうち、鶏卵にたとえられる渾天説に、基本的には属するものと考えてよいであろう。このことについては、『朱子の自然学』(山田慶児著、岩波書店一九七八年刊)I「宇宙論前史」を参照のこと。
- ㉒ 宙合之裏、故散其終上能無偷觀、猶不可得其名、若山然也。尹知章注。ただし、山は、『管子集校』本に従って、「止」に改める。
- ㉓ 慶忌については、『管子集校』六九三頁に、張佩倫云……晉書輿服志武冠「或云齊人見千歲涸澤之神、名曰慶忌……」。御覽妖異部「引白澤圖曰、故水之精名忌」……と。
- ㉔ 同じく蝸については、沫若案……蝸即莊子達生篇「澤有委蛇」と。郭沫若はこの委蛇と『山海經』海内經に引く延維とを、ともに蝸のことであるといふ。
- ㉕ この本文「管子以之」について趙守正の『管子通解』(下冊43頁)では、つぎのように注を加えている。
以：利用。管子以之、尹注：以、用也。言管子独能用水也。
霸王は、『管子』の書にあつては、「霸王之形、象天、則地、化人云々」(卷九、霸言第二十三)というように、孟子など儒家がいふところの、王道に對

- 応する否定的な概念ではない。また、一般にいわれる、単なる諸侯の旗がし
らというようなものでもない。このことは、『管子』霸言第二十三で、霸王
のことを聖王の名で呼ぶことのあることによっても明白である。また、『管
子』度地第五十七では「夷吾の聞くところ、能く霸王たる者は、蓋し天子の
聖人なり（夷吾所聞、能爲霸王者、蓋天子聖人也）」ともいつている。
- ②6 兪兒については、『管子集校』八一五頁で許維遹の説を引いて、この兪兒は
『山海經』中山経の子兒のことであるという。
- ②7 『管子』卷第二十三、地數第七十七。
- ②8 注②6参照。
- ②9 例えば以下のごとくである。
- ③0 夫管仲天下大聖也『管子』卷第七、大匡第十八。
このことについては、『金沢大学教養部論集』28巻2号（一九九一年三月）
所収の拙稿「聖人と氣の世界」第二章、第(二)節参照のこと。
- ③1 前掲注③0参照。